

母子の栄養摂取と運動に関する研究

リサーチセッション：1. 離乳の基本の見直し 2. 子どもの病院食の見直し

山城雄一郎¹⁾，小池 通夫²⁾，東 明正³⁾，宮腰由起子⁴⁾
水野 清子⁵⁾，鈴木千恵子⁶⁾，千葉 百子⁷⁾，清水 俊明¹⁾

1. 研究目的

昭和55年に厚生省研究班による「離乳食の基本」が世にでてから13年が経過し、この間に我が国での経済・社会環境は大きく変動した。その結果離乳食に大きく影響する現象として、市販のいわゆるベビーフードの普及と働く母親の増加が挙げられる。このため「離乳食の基本」に沿って指導されて来た我が国の離乳食の内容が、現状に即さない面が出てきた。具体的には離乳食がその多くを保育所で授与されたり、ベビーフードを使用する頻度が高くなり、母親手作りの離乳食の割合が減少するなど、離乳食の状況が急速に変化しつつある。他方、病人の食事に関して、成人の病院食が患者の好みによる選択性の導入が試みられつつある現状で、子供の病院食の現状を把握し、一般家庭での食事の現状との相違点、保険医療下での小児食の将来への方向づけを探る必要がある。本研究班ではこれらの点を踏まえて、離乳食の基本の見直しとして病院における小児食の検討を行なう事を目的として班を組織した。

2. 研究方法

以下の研究課題の中に示す7つの研究班組織をもって研究を実施した。

①課題：離乳食の見本（研究担当者：水野清子・愛育研究会母子栄養部）

1都6県の5ヵ月～14ヵ月児をもつ母親（4634）を対象にした離乳の実態を調査し、「離乳の基本」に示されている指針との比較を試み、以下の示唆を得た。

1. 離乳の開始の目安として「月齢」と共に「適応」を明記する。
2. 離乳開始月齢は4～5ヵ月とし、遅くとも6ヵ月迄に開始することが望ましい。

3. 離乳期に用いる食品は、離乳の進行にそつてある程度限定し、それを明記することが望ましい。

4. 対照児が摂取している離乳食の調理形態は、「離乳の基本」に示されているレベルより進んでいる者が多かった。調理形態に幅をもたせることが望ましい。

5. 「離乳の基本」では11ヵ月まで詳細な指示がされているが、幼児食への順調な移行を考慮し、離乳完了期を含めた指針を明示することが望ましい。

6. ベビーフードを使用する母親が増加しているので、これにかんする指導指針を明示する。

7. 乳児の発育・栄養摂取量・離乳の進行状況から、栄養所要量を鑑み、離乳食と乳汁の栄養適正比率を考慮した離乳指導指針の策定を試みたい。

②課題：離乳食作りに対する母親の意識と知識の検討（研究担当者：宮腰由起子・千葉県立衛生短期大学）

離乳食指導として現在指針とされている「離乳の基本」が発表された当時に比較して、近年は有職者女性の増加や少子化現象などの家庭内容の変化などの“社会的変化”に加えて、離乳食を作る当事者である母親の調理能力や意識の変化（低下？）が指摘されている。さらに育児情報の氾濫やアレルギー性疾患患者・患児の増加など、“母親と子供自体の変化”も大きい。こうした状況下で、離乳食に対する母親自身の意識や知識を把握し、より適切な離乳食の指導方法を検討することは意義深い。本年度は、既存文献の中から、「離乳食に対する母親自身の意識や知識」のこれまでの動向を把握し、次年度の作成準備を行なった。

1)順天堂大学小児科 2)和歌山県立医科大学小児科 3)熊本大学小児科
4)千葉県立衛生短期大学 5)愛育研究会母子栄養部 6)国立小児病院栄養管理部
7)順天堂大学衛生学

- ③課題：離乳食の現状と栄養学的検討－鉄欠乏の頻度について－（研究担当者：小池通夫・和歌山県立医科大学小児科）
 離乳期乳児の栄養、特に鉄分の動態を測定し、貧血には到らぬ鉄欠乏状態を把握する。次にその治療と適正な離乳法を検討する。
- ④課題：市販離乳食の利用度とその栄養学的検討。鉄欠乏の頻度と発達に及ぼす影響。（研究担当者）清水俊明・順天堂大学小児科）
 鉄欠乏と乳児における可逆的な神経学的発達の異常が欧米において注目されており、我が国においても乳児の栄養法と鉄欠乏との関係、およびその発達に及ぼす影響などについても詳細な検討が必要であると考えられる。本検討において、健常乳児においても鉄欠乏が少なからず認められることがわかった。また、鉄剤の投与により血清鉄濃度のすみやかな上昇に伴い神経学的発達ないしはその改善傾向が認められた。今後、市販離乳食と鉄欠乏との関係についても検討を加えていく。
- ⑤課題：離乳食中のトレースエレメント含有量の検討（研究担当者：東 明正・熊本大学医学部）
 乳児期のトレースエレメント摂取量に与える離乳食の意義を明らかにするために、市販ベビーフードの亜鉛・銅含量の測定、および離乳食モデル献立による亜鉛・銅摂取量の試算を行った。この結果、離乳準備や離乳初期に用いられるベビーフードはその摂取量も少なく、トレースエレメント摂取という意味での意義は少ない。しかし、離乳中期・後期では、離乳食から摂取するトレースエレメント量は大きな割合を占め、離乳開始の遅延は摂取量低下を引き起こす可能性があると考えられる。
- ⑥課題：市販離乳食中のトレースエレメント含有量の検討（研究担当者：千葉百子・順天堂大学衛生学）
 ベビーフード、レトルト食品（離乳食用）中のトレースエレメント含有量を測定し、その適否を検討しつつある。来年度も引き続き例数を増やして検討する。
- ⑦課題：小児病院食見本の検討。（研究担当者：鈴木千恵子・国立小児病院栄養管理室）
 大学病院、小児病院、一般市中病院、国立病院の中から合計20施設を選び調査し、問題点を浮きぼりにして検討するための調査表配布段階であるため、平成2年10月に小児総合医療施設栄養業務連絡会を発足させるにあたり、小児総合医療施設協議会に加盟している21施設を対象に基礎資料として調査を行ったので回答のあった19施設の集計結果を本研究の一助とすべく報告する。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

昭和 55 年に厚生省研究班による「離乳食の基本」が世にでてから 13 年が経過し、この間に我が国での経済・社会環境は大きく変動した。その結果離乳食に大きく影響する現象として、市販のいわゆるベビーフードの普及と働く母親の増加が挙げられる。このため「離乳食の基本」に沿って指導されて来た我が国の離乳食の内容が、現状に即さない面が出てきた。具体的には離乳食がその多くを保育所で投与されたり、ベビーフードを使用する頻度が高くなり、母親手作りの離乳食の割合が減少するなど、離乳食の状況が急速に変化しつつある。他方、病人の食事に関して、成人の病院食が患者の好みによる選択性の導入が試みられつつある現状で、子供の病院食の現状を把握し、一般家庭での食事の現状との相違点、保険医療下での小児食の将来への方向づけを探る必要がある。本研究班ではこれらの点を踏まえて、離乳食の基本の見直しとして病院における小児食の検討を行なう事を目的として班を組織した。